
SPARK CHANGE!!

0:02

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SPARK CHANGE!!

【著者名】

NITRO

0:02

【あらすじ】

いきなり私がトリップした場所は、魔法都市。

広すぎる魔法都市で私は、とてもかけがえのない経験をした。
連鎖する謎、対立しあう善と悪。仲間を思い合ひ気持ちが生んだ
1つの結末、今解禁！ -

プロローグ（前書き）

はじめまして。

初心者で文章も構成もめちゃくちゃですが、頑張って更新していく
たいと思っています！

プロローグ

本当はこんな宿命、背負つて欲しくなかつた。

空には幾つもの星が輝いていて、季節によつて見え隠れするその星は何度見ても飽きず、小さい頃から大好きだつた。

自然と流れてくる涙は、今私自身がお腹の中に宿つてゐる小さな命に背負わせてしまつてゐる宿命にあるのかもしれない。

「霞かすみ 今日の夜は冷える。中に・・・・・」

聞きなれた声がし、振り向くとそこには悲しそうに頭を伏せる大好きな彼。

「ありがとう。・・・・・雅君は優しいわ。でもね、もつもつと此處に居させて?」

静寂が満ち星の降るこの地は・・・・・。

「せめて・・・・・せめて生まれてくるこの子の宿命を、星達がこれからもずっと見守つて下さる様に・・・・・。」

わざよつも沢山の涙が出て來た。

黙つて空を見上げる彼。

「いろんな事に、巻き込んでしまつて……。」

「いいの。これは私の宿命だから。……。」

やつとお腹に手を当へ、皿を瞑る。

「星に迷ひてはいけないわ。」

母親の言葉に反応するかのよつて、お腹が少し動いた気がした。

「どんな苦難にも立ち向かいたさう。どんなに苦しう事が有つても、地ばかり見ていては駄目。」

「上を・・・・・空を見て生きなさい。」

やつしていれば、掴めない星（輝き）なんて無いの
だから・・・・・・・・・・・・

貴方の名前はどうしようかしら？

そうね、私がまだ雨になる前の霞かすみなら、
と静かに降り続ける『霖りん』にしましょうか。

貴方はしんしん

平々凡々奇々怪々

そりゃあもう全力疾走で逃げてます！－！

私の名前は楠木 霖。

年齢は16歳。今年から無事に高校に入学。

今日の入学式を終え、早々家に帰宅する。

学校から伸びる道の両脇には満開の桜の木が植えられ、桜の積もつたじゅうたんの上を走って行くと、少し遅れて桜の花びらがフワリと地面から舞い上がる。

春の陽光。まだちょっと寒いけれど空を見上げると一コ一コと笑っている太陽。

太陽の光で照らしだされた空が物凄く綺麗だ。

だが、人がこいついい気分になつている時に限つて問題は勃発する。

私は全速力で町を疾走していた。その理由は今さつき猫が魚を盗んだ事にあった。

まず魚をくわええた二ヤン口が、近くにあつたグレーフフルーツてんこ盛りの段ボール箱を倒し、運の悪い事に急な坂道をそのグレープフルーツがゴロゴロと転がり落ち、下に停めてあつた自転車の行列をを将棋倒しの様に難ぎ倒し、これまた運の悪い事に黙つて見ていた私が見回り中のお巡りさんに目撃され・・・・・

逃げるが勝ち、
と言ふ諺ことわざがありますね。

追い掛けられています。

私がやつたんじやないのに！！

後ろから「止まりなさい！」とお巡りさんの声が聞こえる。なんとか逃げ切らうと、近道である神社の参道を渡り、古くなつても存在感のある鳥居を潜り階段をかけ降りようと足を出した。

が。

ガコツ！

足を滑らせて、長い階段を転げ落ちてしまつた。

後ろからひびきの小さな声で叫ぶお巡りさんの声がある。

だけど一番最後に聞いたのは、神社に生い茂る木々達のザアザアという音とぶわりと沸き起くる風の音だった。

まるで迷っている誰かの背中を押すように、木々達は優しい音とぶわりと優しい風を送ってくれた。

たどり着いた地上と謎まみれ男

落ちていく、落ちていく、その空間に重力や風を感じず、ふわふわとした感覚だけが残つた。

自然と恐怖感はなく、まるで時を刻むかの様な安定感に囲まれて私はタツと地面にたどり着いた。

・・・・・。

高いところから落ちて来た筈なのに、痛みを感じなければ痒さも感じないものだから、自分の落ちて来た上を見てみると、綺麗な星達や月が群青色の空に輝いていた。

何時の間に夜になつたのだ、と視線を定位置に戻し、周りを見渡す。目の前には綺麗にライトアップされた巨大な城があり、周りには色々な形をした扉や可愛らしい動物像やぎよつとする色合いの花、ブリズムで光つた水が噴き出る噴水もあつた。

巨大な城に目を移すと、そこは西洋のファンタジー小説に出てきそうな装飾が施された外壁に、綺麗に掃除されている窓からは中に入が居るのを確認できる。

シャアーッ、と噴水の水が高く上がる。音につられ噴水を見ると空高くあがつた噴水はとても綺麗で、キラキラと光り見ている者を不思議な感覚にさせる。

だが、何時までもそんな感傷に浸つてゐる場合ではない。

「何処だこい。」

我ながら冷静なツツ「ハミを入れると同時に、後ろの茂みからガサガサと不気味な音が聞こえた。

「！？」

ビクッとしながらも反射的に後ろを振り向く。
何も無い兼居ない。

ホッとしながら視線を戻そうとした。が、しかし。

いつの間にか後ろに人の氣配を感じ、バツと元の位置に視線を戻す
とそこには黒いフード付きのマントをした男が立っていた。

はい出ました、事の発端。

「ひつ……！」

すらりと伸びた謎の生物の顔は真っ黒なフードによつて鼻から下しか見えない。片手に分厚い本を持っていた。

そして、謎の生物の肩らしき所にちょこんと座つていた、青い目をしたマヌケな人形と目が合つてしまつた。

その怪しそうな姿形に顔を引きつらせると、相手の人間はフードを取りながらケラケラ笑つた。

「変な顔、驚いた？これ俺の人形なんだ。名前はルーシィ。こいつと目を合わせると、目を合わせた人間の個人情報を盗んでくれる有能な俺の腰巾着。君、新入生か、ふうん。」

「な、何よいきなり！あんた誰？ていうか、ここ何処！？新入生つて？」

「まあ、ここで会つたのもなんかの縁。ほら来なよ、面倒だけど学院を案内してやる。」

「ん？」

「ああ、俺の名前はレオ。よろしくね、霖ちゃん^{りん}」

話の展開が速すぎてよく解らなくなつていた私は、とりあえず思つた事を口走つた。

「『』めん、意味深長。」

「は？何かおかしい事でもあるのかい？」

「おかしい事だらけじゃボケ。」

「まあついてきな。俺がちゃんと教えてやる。」

『キャンベリー魔法学院』

歴史ある魔法学校の一つで、世界中から色々な人が集うが皆が皆行ける学校では無く、限られ選ばれた者だけが通う事の出来る学院。それが、魔法都市第7区域（エリア7）に大きくそびえ立つキャンベリー魔法学院。

魔法都市とは第1区域（エリア1）から第10区域（エリア10）まである、魔法が物凄く発展した町で、多くの魔法使いや魔術師、鍊金術師などがここに集結している。

毎年学院に入る事が出来る人を、魔法省まほうじょうによって決められ、その1人1人にこここの世界に来るショックを与える。

『転ぶ』『落ちる』『倒れる』などなんかしらのショックが無ければ来られないらしく、私が窃盗猫（一番の原因）を発見しグレープフルーツが転がり自転車がなぎ倒れお巡りさんに追いかけられる事を、全て仕組まれていた事になる。

全く本当に・・・なんて言つかちょっと黙れ。

魔法都市には、魔法使いや魔術師だけでなく超能力者や呪術師、なんの力も持っていない普通の人間も中には居るという。

キャンベリー魔法学院は完全全寮制で、真ん中にある授業を行う棟を『B棟』と呼び、そのB棟を囲むように立っている5つの棟が寮になる。

クラスは5つあり、そのクラスごとの寮棟になる。

「クラスはそれぞれ、『ゴールドバーグ』『ハンプシャー』『オルムステッド』『サリンジャヤー』『レインウォータ』、この5つから成る。」

大量の情報を聞きながら、レオの後についてキャンベリー魔法学院へ入つて行く。

「レオは何処のクラスなの？」

「俺は、ゴールドバーグの3年だ。クラスには5つ全てに標語モットーが有る。

『素早い行動で火花の様に天を翔ける電光石化・ゴールドバーグ』

『治癒防御の立派な心構えを持つ気宇壯大・ハンプシャー』

『常に攻撃の核となり猛烈な威力を持つ獅子奮迅・オルムステッド』

『ありのままの心を出し勇氣と希望を与える天真爛漫・サリンジャー』

』

『自分の思つがままに突き進む直情徑行・レインウォータ』

それぞれその素質があるクラスに組み分けされるんだ。』

「へえ、なんかかっこいい。でもさ、私魔法なんか使えないんだけど。」

かつこことは思ったものの、何故私がここにいなければならぬのか?とこう疑問を解決すべく、至極最もな質問を投げかけてみたが、

「これから勉強するんだから当たり前だろ。」

「ん、だから、私はここに入学する訳じゃないでしょ? 大体貴方怪しい。」

白けた顔でそう告げるとレオはサラサラの赤毛を揺らしながら、ケララと笑いやがつた。

「確かに怪しきけどさ。」

自覚あるんだ。

「俺嘘は絶対に言わない主義なんだよねー。」

』

最後の言葉にぎゅうにける。

「それにさ、君もつ名簿に登録されてるから。じゃなきゃこの世界

に来れないから、つてこつかまつてから歸るにせひの学院卒業しないと帰れないから。」

あつやり言われさつあと同じ様にカラカラと乾いた笑い声を出すレオに、僅かばかりの殺意が芽生える。

「勝手な事ばかりしてんじやねえーぞコノヤローー。お？じやあ、あれか？このヘンテコ学院に行つてインチキ占いで卒業するまで返さないつてか？お？」

「じょおーだんじやあないーーおいレオつて奴、歯ア食いしばれ、私がこの悪趣味宗教ーから叩き直してやる。」

それから暫く悲鳴と断末魔が絶えなかつた。

「理事長、あの楠木霖くすのきりんって言つ怪物どいつもかなりません！？」

レオは霖の拳を魔法を使い軽々避けたが、霞の方が一歩上手だつた。ガーーーーーとまるで手負いの猪の如くレオの腕に噛みつき、それからもなんやかんやと喧嘩が続き、先生に見つかり怒られ傷だらけになつたレオは医務室で理事長であるアガサ・マクダーモットー氏に「冗談半分本音半分の愚痴をもらした。

レオの腕には保健医ホヴィ先生によつて包帯がぐるぐると巻かれていく。

霖はと云つと、なんだかんだいつて噛みついた事に反省しており、謝つていたが、医務室のふかふかのベッドを見つけるなりすぐさま転がり落ちた。3秒しない内に寝息が聞こえた。

保健医のホヴィ先生は恰幅のいい優しい女の人が、気がよく面白いので院内からでもかなりの人気を評している。

「うつふふ、お年頃なのね。」

さも愉快そうに笑う理事長にレオは苦笑いをもらす。

理事長はもう歳だが、品のある顔立ちは衰えてはいない。もちろん魔術能力に関しては、最高峰だ。

「オルムステッドクラスですか？」

そう聞いたのはホヴィ先生だった。

暴力的…いや、獅子奮迅のクラスである。

ホヴィ先生は腕の包帯巻きが終ると、次は足のふくらはぎに消毒液を塗り始める。

「あつ！…い、痛い！痛いですよ！ホヴィ先生！…」

「あらまつ！男の子でしょ！これぐらい我慢しなさい！…！」

「…」

傷口に消毒液を強くぶつけられたレオは悲鳴を上げたが、ホヴィ先生は気にすることなく包帯の上からバシンッと傷口を叩いた。

その光景を見て理事長は優しい笑顔を見せたが、直ぐに少し悲しそうな顔になった。

「いいえ、彼女はゴーリードバーグクラスよ。」

「え？ 嘘？ アレがゴーリードバーグ！？」

理事長の顔にも気付かずレオが嫌そうな顔をする。

隣で理事長はそっと目を伏せ、それから霖の眠っているベッドに目をやつた。

「ジェシカー！」

声からしてやんちゃそうな少年の声がする。

ジェシカと呼ばれた少女はふわふわのブロンド越しに振り返る。

そこには声の主、コニー・レオンハートが手を振りながら走って来た。

「あら、おはようコニー。」

「おはようジェシカ。今日入学式が終つたら、一緒に学院内を探検しないかい？」

「いいわよ！私達何処のクラスになるかしら？」

ジェシカとコニーは2人並んで、入学式が行われる講堂までB棟から繋がる通路を歩いていた。

「さあ、でも僕入るんならサリンジャーがいいな。」

「私、レインウォータは嫌だわ。」

「ああ僕も。あそこ性格の悪い奴等がいくんだろ？」

「ゴールドバーグって超能力科の人気が結構いるらしいわよ？」

「僕は、魔術科に行くつもりだけだ。ジェシカはどうするんだい？」

「まだ決めてないわ。それに、魔術科か超能力科かどっちに行くかは先生達が決めるのよ。」

そんな話をしていると田の前に何か言い争いをしている男女を見かけた。

「痴話喧嘩かしら？」

「ああ。」

ジョシカ達は端っこに寄つて2人の会話を聞く。

「だから、何で私なのよ！魔法使いだあ？冗談じゃあない。」ちと
ら細菌学者つちゅー夢があるんだよ！」

「悪趣味な夢だな。それに何度も言つてる通りここ卒業しないと帰
れない。これで100回目だ。ほらもうすぐ入学式が始まるぞ！」
「どうして私が？急にこんな知らない場所に来て、不安でたまらない
のに……。」

何故か物凄く悲しくなつてくる。今までの不安が一気に日に集中す
る。必死に堪えても出でしまう物は出でしまう。

「…………泣くなよ。ほら、大丈夫だから。」

肩に回された手が暖かくて、安心してしまつ自分がいた。

「ふん。レオのばーーか。ハゲてしまえ。」

強がつてしまつ自分を見て、今自分自信がここに居ると自覚する。

「…………。」

最悪の捨て台詞を吐き、ピューピューと効果音が聞こえてきそうな位
走つて逃げた霖の背中が消えた時、レオはため息交じりに霖とは反

対方向に歩こうとしたが、振り向くとそこには今日入学式を迎えるであろう2人の男女がレオの事を見上げていた。

ジェシカとコニーだつた。

「ああ、君達新入生かい？」

声には出さず「ツクリと2人は頷いた。

「おめでとう。今俺と話してたアホと仲良くしてやつてくれ。」

そう言い残し2人の視線を受けながらB棟の方へ歩いて行つた。

「見た？あの変な顔！」

「ああ見た見た、何だあの人形！！」

どうやら目を合わせてしまつたらしい。

謎の人形ルーシィと。

B棟と講堂を挟む通路にジェシカとコニーの笑いがザーラザーラと響いていた。

友人と楽器庫の謎

今年2回目の入学式が行われ、クラス分けをされ、何故か今私は2人のお友達が出来ていた。

2人とも私と同じ『ゴールドバーグクラス』。

「霖、学校探検に行こう。」

「いきましょ」

「・・・え、あ、はい。」

2人に両腕を引かれ、つかの間の学院内探検が始まった。

左には「ニーナ」と名乗った茶髪のやんちゃそうな少年、右にはふわふわのブロンドとクリクリしている琥珀色の瞳が印象深い少女が居る。

私達はまだ慣れていない学院内でうろつろうろつろ。

すると丁度立ち止っていた前の教室の扉が開き、偶然にも中からレオと黒髪の知らない人が出て来た。

「あ。」

「やあ、入学おめでとう。」

レオは私を見てニヤニヤしている。氣色の悪い奴だ。

「霖ちゃん、友達できたんだ。」「む、なんだよこのはげちょびん。」

「

「(イリツ) 相変わらず口の減らない奴だ。あ、そつそつ、」
アル・リーガン、俺の唯一無二の友。」

「よろしく。」

すらりと伸びたアルはにっこり笑った。

その姿はレオよりも全然かつこよく見えた。

「レオ友達いたんだ。」

「君少し黙ろうか?」

アルがクスクスと笑う。

他愛のない口喧嘩を繰り返していたら、両端から服の裾を引っ張られた。

「?

「ねえ霖!ここの図書館に行くべきよね?！」

「ん?」

「何言つてゐのさー図書館なんてつまらない所、僕は行きたくない
！それより楽器庫を見に行こうよ。この学院には沢山の珍しい楽器
が置いてあるんだ！」

「へえ、それは見てみたいかも。」

私の一言で決まった目的地。

アルは用事があるからとレオと別れ、何故かレオも着いてきた。

数々の楽器が壁一面の棚に並べられていた。

横笛の類いの物だけでも相当な数だ。

「こんなに楽器があつても誰が使うのかしら?」

まるでカタツムリの様な楽器を手にしたジェシカが呟く。答えたのはレオだった。

三味線とギターが合体したような形に、アラベスク模様の施してある『』をじっと見つめたまま、小さな声で。

「音には、今の魔術力ではとてもじゃないけれど解明出来ない『力』があるんだ。その計り知れない『力』は、その音を奏でる者によつて異なるけれどね。」

小さくても良く通るレオの声を聞きながら私は、オカリナの様な楽器に意識をとられた。

「?」

不思議に思いそつと手に持つてみると意外とずつしりしている。

「それぞれ楽器には、作つた人のイニシャルか名前が刻んである。そして魔力も宿つているんだ。」

レオの言葉に、私はそのオカリナの様な楽器をまんべんなく見る。どこかに作った人の名前が刻んであるはずだ。

あつた！

小さくて読みづらい。

「…………え…………？」

ほんの小さな声がレオに聞こえたらしく、レオが顔をあげる。だが、今そんなに気を回している暇ではなかつた。

そこに刻まれていたのは、

K a s u m i K u s u n o k i

「嘘、でしょ…………。」

紛れもない、写真でしか見たことのない、母の名だった。

レオの意志と朝の血祭り

夕食は、今日入学式が行われた講堂で取る。

私は楽器庫の事が気になつて、豪華な食事も喉を通らなかつた。

明日から授業も始まる事もあつて、私は食事もそこそこに自分の部屋に戻つた。

寮の部屋は一人部屋で、必要最低限の家具が置いてあり、壁には制服と自分のクラスのエンブレムが飾つてある。

「はあ。私、しつかりしなきや。」

ボフツッとベッドに横たわり、窓の外を見上げる。

写真でしか見たことの無い母。 私を生んだ後、死んでしまつたと聞かされていた。

その名前がどうして、…どうしてこの学院に残つているのだひつ。

「やあ、今日はお疲れ。」

「ひいいつ！ー！」

いきなり空中から姿を表したレオに、私は普通にビックリしてしまう。

「な、何でレオがこんなといひむべー。」「静かにしろ！」

つい大声を出してしまった私にレオは、ぐいっと手を私の口に押し当てる。

「女子寮に入った事がバレたら、鬼の生徒指導員に十字架の刑を処される。」

「あらおつかない。でも何で私の部屋に来るのよー。しかもいきなり空中から現れて…」

「まあまあ。」

レオは私の目の前で掌を前後させた後、図々しくも私のベッドに寝転んだ。おい。

「ちょっと人のベッ…」

「今日楽器庫で何を見た。」

「うつ」

ぎろりと睨まれて押し黙ってしまう。

だが、レオに言つてどうする？

心配をかけるだけだし、しかもあまり関係ない。

「霖、よく聞け。」

レオはそういうとベッドに転がったルーシイを片手で掴み立ち上がる。

そしておもむろにホールドバーグのハンブレムに近寄り私の正面に立つた。

「いいか、悩んだ時や思い詰めた時が来たら、迷わず俺の所に飛ん

で」。 「

レオのHメラルドグリーンの瞳が私を真っ直ぐに射ぬく。

「俺が、全部受けとめてやる。」 「…………レオ。」

いつもは[冗談を言つて]いる口から[こんな言葉を聞かされて、私の胸は自然と熱くなる。
そして田も。

「こちなりこんな世界に来て、不安なのは解る。けど、決して苦しい事ばかりじゃないんだ。」

レオとその後のHンブレムがぼやけて見える。

「」「いつ時は俺を頼れ。」

力強く言われたその言葉が、あまりにも優しかったから、涙がぽろぽろ出た。

その夜は、普段から蓄まっていたものが出てしまったのかも知れない。ずっと泣いていた。

「ん、……」

* * *

朝、私は自然と目が覚めた。

昨日もんざん泣いたせいか目が腫れている感じがする。

まだ眠たい体を反転させる。

……おかしいな、何故レオの顔がどうアツブであるのだろう。

「うあ、うはー。」

「二十九日未明、北風甚強、舟船難進。

私のベッドで、しかも隣で、まるで当たり前の様に寝そべつてい

「つたぐ、寝顔はあんなに可愛いいかつたの?」「どうして?」「いいから、せつねと出でていつてよ。一度するからーー。」「へえ、そりやあいいね。ここに置くよ。」

私は枕をレオの顔に押し当てる。

「何詫の解らない事言つてんのよ！しかし心が、わざ出でしませんわいよ！」

だが簡単に枕を退かされる。

「つれないなあ。霖、昨日の夜の事憶えてないのかい？あんなに可愛い顔で泣いて。」

ハイ、血祭り執行。

ひやぶね返しなりぬベッド返し、自分の腕力に感心致しました。

レオの意志と朝の血祭り（後書き）

こんにちは！

ここまで読んで下さりありがとうございます！

次回は主人公達が通うキャンベリー学院の説明文を更新したいと思つています。

その内キャラクター設定、魔法都市設定文も更新するつもりなので、よろしくお願ひします

番外編・キャンベリー学院設定

『キャンベリー 魔法学院』

歴史ある魔法学校の一つで、魔法都市の中でも学校が多く有る第7区域（エリア7）に大きくそびえ立っている。

エリアの中でも一番規模が大きな学院であり、魔法が出来なくとも将来伸びる可能性がある者は入れる仕組みで、数々の有能能力者を出している。

毎年学院に入る事が出来る人を、魔法省によつて決められ、その1人1人にこの世界に来るショックを与える。

学院は完全全寮制であり、卒業するまで元の世界には帰れないと脅し強制入園される。

だが実際、それは諦めさせるための口実であり、卒業するまでも元の世界には帰れる。

現在の理事長はアガサ・マクダーモットーであり、生徒人数は1000人くらい。

この学院は5年制であり、クラスも5つある。

『素早い行動で火花の様に天を翔ける電光石化・ゴールドバーグ』
シンボルマークはペガサス

『治癒防御の立派な心構えを持つ氣宇壯大・ハンプシャー』シンボルマークはイルカ

『常に攻撃の核となり猛烈な威力を持つ獅子奮迅・オルムステッドシンボルマークはライオン

『ありのままの心を出し勇氣と希望を与える天真爛漫・サリンジャー』シンボルマークはネズミ

『自分の思うがままに突き進む直情徑行・レインウオータ』シンボルマークはカラス

それぞれ自分に合っているクラスを発表される。

主に授業は魔法実践や歴史、一般教科の数学と理科は必須らしい。その他にもオカルトじみた黒魔術や白魔術、占星術、時には『人の呪い方』等、少し疑わしい授業も多数存在する。

授業が行われるのは『B棟』と呼ばれ、その周りを5つのクラス分けされた寮がある。

中心に大きくそびえるのがB棟、その二分の一の細さしかない寮が5つ囲むように立つ。

B棟は地下1階地上10階とかなり広く、食事を摂る講堂、授業を行う各教室、図書館、医務室などがある。

寮も同様に地下1階地上10階になつており、地下1階は大浴場、地下1～5階は女子寮、6～10階は男女寮になつている。

就寝時間になると同時に、5階と6階の間に赤外線センサーやら警報機やら色々な罠が仕掛けられる。

地下1階の大浴場はいずれも男女混浴なので、あまり行く人は居ない。

番外編・キャンベリー学院設定（後書き）

この設定文は、情報が増え次第更新します！

「これが初授業！？」

「インダス文明でインダスー！」…………『

「（ほんっ、えー、そもそも魔法と言つのは）はですね。』

寒いジャレを一発。

魔法理論を教えるエルモ・アルド氏。

「馬鹿野郎！！！ 笋で空も飛べねエ奴と草むしりも出来ねエ奴はとつ
と死んじまえ！！！」

「…………声でか。」

心臓に響く野太い声での暴言。

魔力実践を教える暴言教師ことドン・ブルーノ氏。

「アンダラマクダラバラバラソワカ…………ハアアアアアア！
！……」

じやらじやらじやらー。

「いいですか、皆わん。黒魔術で一つ欠かせない事は。」

怪しそうな呪文と雰囲気。

黒魔術を教える怪しそうな女、ミラ・リセリン氏。

「大体薬なんものは簡単に行くのが好ましい。近頃の若いもんは
何もかも難しく考える故どんどん薬品に人気が無くなつていくでは

ないゴホッゴホッホ・・・・・。つまり薬品作りは対して難しく
考えなくてよしだ。そもそも「んなもん テ @?」

ペラペラとどうでもいい事を喋り続け、生徒の言葉を完全無視、挙句の果てには呂律も回つていないと言う、魔法薬品学を教える自称薬学博士のディータ・スプリンガー氏。

色んな意味で疲れた初授業。
今日の授業はもう終わりだ。

私とジェシカとヨーは空腹の為、講堂へ食事を摂りに向かつた。

「しかし変わった先生多いなー。」

コーヒーがスペゲッティをペロリと平らげた後に言つ。

さも嫌そうな顔をするジェシカに私はジンジャー・エールを飲み干しながら聞く。

すると、やたらとこの学校の事に詳しいヨーが天井を向きながら言つた。

「ここにいる先生達は皆魔法使い。理事長も保健医もあの暴言吐

くブルーノも、あれで一応魔法使いただ。」「

私とジョシカはデザートのケーキを頬張る。

「コニーって何でこの学校の事やたら詳しいの?」「

「ん?僕?」

「うん。」

コニーがドラえもんみたいな顔した。

「そりゃ、両親がここ卒業生だからね!」

「へえ、コニーの両親ここ出たんだ。」

「うん、まあね。2人共サリンジャークラスだつたんだ。」

コニーしながら言つコニーがさりげなく右手の掌を広げる。

するとボンッと不吉な音と不気味な煙が現れ、私とジョシカの目の前に大きなガマガエルが現れた。

「うわっ!!」

「気にしないで霖、コニーは魔法をいたずらに使うんだと本氣で思つてゐる。」

もう一度強く、本氣で呟つてゐるよ、と言つて懷から杖を出しコニーに向ける。

ボンッ!

ぎゅっ!

シャー!

3つの音が重なり、ガマガエルが消えコニーの叫び声と共に蛇が現

れた。

コニーが1人で騒ぎ始めた時、それ以上の声が講堂に響いた。

「なあにやらかしてんだあ！？あつ！？」
「ひいいつ！」

声のした方を見ると、漆黒の髪を一つに束ねている少女が、酷くひ弱そうな少年を壁に短刀刺しにしていた。

「おじてめえ、次やらかしたらどうなるか、解つてるよなあ？」
少女の方はエンブレムからオルムステッドクラスだと解つた。細い体つきだが、……強そうである。特に眼力。

「もっ、もっしません！」

明らかひ弱そうな少年の方はレインウォータクラスだ。少女の方を見てこの世の終わりの様な顔をしている。

「あ、あれ、この学校で一番怖い人。獄門道神樂先輩。」

なるほど、今前からしておつかない。

「確かにこの学校の生徒指導員よね。ああ確かにあれは怖いわ！」

ジェシカの言葉で、レオの言葉を思い出した。

›鬼の生徒指導員に十字架の刑を処されるゝとレオは言っていた。
あの時はよく解らなかつたが、成る程そういう事か。

フォークを起きながらそつ思つてゐると、レオの声が聞こえた。
あれ？

「やあ神楽ちゃん。」

「出たよ変態。」

「レオ先輩だ。」

「そうね。」

黒いマントと肩のルーシィその他もうもうおかしいレオが講堂に来た。

生徒指導員と不穏な影

「オルムステッドクラスの獄門道神樂だ。宜しく。」

「二一ハオ。ハンプシャークラスの曉李シャオイです。」

先ほど男子生徒をぶちのめしていた神楽さんと、その横に褐色の眼を持つた女顔の中国人の生徒指導員が、レオに連れられ私達に自己紹介をしてくれた。

「シャオ 暁と名乗ったその人は、口の口角が優しそうに上がり、栗色の髪は後ろで一つに三つ編みにしてある。

「こいつは俺の可愛い後輩。仲良くしてやつてよ。」

レオが私達を一人づつ紹介した。

「ほう、新入生か。道理で見たことのない生徒だ。」

ツンヒ、している神楽さんに、暁さんは私達にクスクス笑いかける。

「本当は子供が好きなのですよ。素直じゃありませんね。」

「な、何余計な事喋つてる！暁！」

クスクス笑いながら暁は軽く私達に挨拶し、足早に講堂を出ていく。その後をいやもんを付けながら神楽さんも講堂を出ていった。まるで嵐が去ったかの様だ。

私達もレオに続いて講堂を出る。

「ははっ！お似合いだろ？神楽ちゃんつてシャオ君には弱いんだよね…………って、あ？」

「ん？どうした？」

「やだ、コニーそんなに大きいアイスクリーム食べてお腹壊しても知らないわよ。」

「ジエシカも食べる？」

「いらないわよ！」

レオがいきなり止まるから私はレオの背中にぶつかり、ジエシカとコニーもぶつかった。

「ちょっとレオ？どうしたのよ？」

レオは長い手で私達を道の端の暗い所へ寄せせる。しつと人差し指を口元へ持っていく。

私はレオの黒布を掴み、レオの田線を辿る。

その先には長い金髪を高い所でポニー テールにしている女人と、眼鏡をかけ情けなさそうな顔をした男が歩いて来た。

「あれ？あの人……」

「今日の授業でダジャレ言いまくった……」

「魔法理論のエルモ先生ね。」

「でも隣の女、誰だらう？」

入学したてでも学院内の殆どの教員を知っていたコニーが知らないと言つことは、もしかしたらこの学院の教員ではないかもしがれない。

2人が近くに来たので私達は耳を澄ませる。

「この件は内密でお願いします。」

「もつもちろんですとも！」

「学院内の処理もくれぐれも慎重にして下さい。」

「わ、解りました！」

2人の会話はここまでしか聞こえなかつた。

私達は再び廊下に出て、2人が歩いて行つた方を睨む。

「あの2人、怪しいー。」

ジエシカのくりくりな目が半分しか開いていない。

「あの女、誰だ？」

「魔法都市魔法省の役員だ。俺も名前は知らない。」

「その役員が何でエルモ先生と？」

レオは真剣な顔で一人頷く。

「お前等明日からエルモには気を付ける。ってか喋るな。」

凄い眼力で睨まれて私達はコクコクと頷くしかなかつた。

自分の持つ力

夕食が終わり、私はシャワーを浴びたが、就寝時間まで大分時間があつたので、明日の授業の予習でもしよう」と図書館に向かった。

図書館は静か、と思っていた私だがそれは大きな間違いだった様である。

奴が居やがった。

「やあ、どうしたんだい？マヌケ面さげて。」

しかも大量の本に囲まれて。

フード付きの黒マント羽織ったキショイ奴、レオが難しそうな本を片手ににんまり笑ってる。

ついさっきまで一緒にいたとは思えない。

「どうしてこんなところに居るのよ。」

「ふん、俺はここ図書委員なんだ。君こそ何故こんな所に来たんだい？君の解る様な本は無いよ。」

相変わらずムカつくやつだ。

「暇だつたの。明日も授業あるし、何か勉強しようと思つて。」

「へえ、勉強か。教科によつては教えてやるよ。」

何だこいつ偉そう。

「予言術」

「ああダメダメ、俺その類いのもの無理だから…」

レオは本に視線を戻した。

早読みが出来るのか凄まじいスピードでページを捲っていく。

「じゃあ何が得意なの？」

「ん？得意な魔法かー…。これとか？」

ボツとレオの手から火の玉が出た。

「わっ」

「これ超能力だけどね。……お前、随分楽しそうに見るな。」

「だつて凄い！」

それから次々とレオは魔法や超能力の力を見せてくれた。
魔方陣出したり、直接手を付けずに本を棚に戻したり、髪の色や体型を変化させたりもした。

「何か、本当に魔法学校に来たって感じ。」

「明日予言術なんだろ？きつと言われるぞ。貴方は何々の力が有りますよ！くつでな。」

「ふつ！何それ！？」

「一年の一番最初の予言術では、自分にあつてる魔法や超能力の力を先生が予言してくれるんだ。」

ちなみに俺は発火能力、と言つて炎を自分の周りに出した。

「へえ、私は何だろ？」

「怪力じゃないか？」

「何が言つた？」
「いいえなんでも。」

* * *

予言術の先生は変な訛りなまのある女人の人で、ベラ・アシモフと名乗つた。

「ジヒシカ・オークウッド、可愛らしこ嬢さんじやの。貴方、カード占いが好きですね？」

「ええ！大好きだわ！」

「うむ。カードは貴方をきつと守ってくれるじゃろよ。貴方は『風』の力があります。」

「おや、ロニー・レオンハート、はてー何処かで聞いたことの有るような無いような……。」

「僕、レオンハート財閥の一人っ子ですよ。」

「そうじやー！そうじやー！そうじやー！…サリンジャークラスの、そりや悪戯好きな奴等じやつた。その日、両親にそっくりじや。」

「えへへつー！」

「うむ、君は両親と同じ『音』の力じやな。」

「む。楠木霖？」

「よ、よろしくお願ひします。」

ベラ先生は灰色の目を私に向ける。

「貴方、母親の名前は何と言つ?」「え……。えっと、楠木霞かすみです。」

ベラ先生は一瞬目を開く。だが直ぐにもとに戻り、私の手を握つてくる。

そして、小さな声でこう呟いた。

「貴方の母親は本当によくできた人だった。」

「……それって」

ベラ先生の手を握る手が強くなる。

「貴方のその濁りの無い真つ直ぐな瞳、母親譲りですね。……貴方の力は母親と同じ『空』じや。」

「空……?」

いまいちピンと来ない。

「昼は大きな光となり眥を照らし、夜は持つべき宿命を司る。」

ベラ先生の手が離れた。

「頑張るのじゃぞ。」

森の中での刺客

「僕、『音』だって！嬉しいなあ！音楽つていいよね、うんうん。」

一人で喋り自分で納得するヨニーに対し、ジョシカは自分のカードコレクションを私に見せてくれた。

「わあ凄い。これ全部ジョシカ一人で集めたの？」

私の手にはおよそ数百枚にも及ぶカードの束。

「やうよー特にこのカードはレアで、世界にたった21枚しかないのー。」

そう言つたジェシカが取り出したのは、5枚のタロットカードの様なカードだった。

「5枚も持つてるのね！」

「そつなのーどれも魔法では凄い力を見せるのよー。」

バラバラとカードを回しながらジェシカは嬉しそうに笑つた。

* * *

授業が終わり、私は魔法薬品学のティータ先生からレポートを持って来るよう言わされたので、私はB棟最上階にある職員室に向かつた。

ディータ先生の部屋は薬品独特の臭いがし、あまり長時間居たくなかった。

が、

「悪いが楠木さん学院外にあるあの森の中から『モヒカン草』を探つてきて下さいな。んじゃ宜しく。」

「え？ は？ ちょっと待つ……」

行つてしまつた。

ディータ先生が窓から見える森を差し、一枚のその『モヒカン草』つて草の絵が描いてあるメモを寄越した。

つてか何だモヒカン草つて。

何か押しつけられた気がするが、このまますっぽかす訳にはいかない。＝モヒカン草を探しに行こう。

* * *

「レオ、何してんだ？」

「ん？ アルか。」

「お前、占術苦手だよな？」

「ああ何も出来ない。」

レオの手には水晶玉があった。

レオが図書委員を努める図書館に来たアルは、水晶玉片手に遠い目をしているレオを見てぎょっとした。

「何か雨… 降りそつだな。」

レオがまた遠い目をしながら窓の外を見て呟く。
アルは、はつと思い出した。

「そういえばわざわざここに来る途中で、楠木さんが第9区域（エリ
ア9）の方に歩いて行くのを見たぞ。」

アルが天文学の棚に手を伸ばしながら言った。

「第9区域？…………何で霖が？」
「さあ？…………レオ？」
「俺も行く。」「
「ああ、行つてらっしゃい。」

レオの後ろ姿と、レオが机に置いていった水晶玉を交互に見たアル
はニヤリと笑つた。

「これはこれはもしかしたら…………恋かな？」

* * *

「んーもう一モヒカン草なんて何処にも無いじゃない！」

何考えてんだ、あの古いぼれ教師。

もう日は暮れかけていて、森の中だけあつて何だか不気味だ。
ぎやーぎやーとカラスが飛び交う。ふと上を見る。

「かーかー！」

ん、おかしいな。何か見えてしまった。
目をこすつてもう一度見てみよう。

「かーかー。」「
・・・・・・・・

やつぱりいる。

不気味なカラス達に交じって、何だかもの凄くマヌケなカラスが私を見下ろしていた。

大事なことなのでもう一度。

もの凄くマヌケなの、そのカラス。

「怪我でもしてるの?」

「まさか、あつしはそんなにマヌケじゃあないっすよ。」

いやツシ「口!!所がありすぎる。

いやはや、厄介事はごめん。

老いぼれ教師には悪いが、……帰ろつ。

そつ思い踵を返す。

その瞬間シユツと何かが頬をかすめた。

頬から血が垂れる。

その何かが鋭利な刃物だと解つたのは、後に倒れた後だった。
もう一度刃物を振り下ろされる。

バサバサっとカラス達が飛び立つた。

マヌケなカラスと頼もしいテレポーター

かーかー！

バサリ……

刺されると思って瞑つた目を、妙な浮遊感を感じ少しづつ開ける。
足下には森が見える。

周りは日が沈みかかった夜空が見える。

私は飛んでいた。

「大丈夫でやんすか？お嬢。」

そう、さつきのマヌケなカラスが私の身体をたつた一匹で持ち上げ
飛んでいた。

「あなた私を助けてくれたの？」「これくらい大した事ないっすよ
かーかー。」

「あ、ありがとう。」

マヌケなんて言ひ「めんなさい。

「で、でもあつし、そ、そろそろ、無理でやんす。
「え？……ひやつー！」

さすがに人間を一匹で支えるのは難しいだろう。

けれど「ひや」と普通に落ちる。

「ひや――――――」

「サドサード――

「うびよー」

「うつー」

「かつー」

落ちた拍子に三つの声が重なった。
……ん?二つ?・

「レオ!?

「かー?」

「あ、痛。」

私の下には黒く伸びた物体。頭らしき赤毛が見えた。
そして私の頭の上にはカラス。
何かのコントみたいだ。
て、言つてる場合じゃない。

「レオ!助けて!何か私刃物で襲われたの!」
「は!?」

レオは私の頬の傷を見て目を見開く。

「顔は見たか?」

「つうん、見えないの。なんか、
もや露みあわみたいのがかかつてる様で…」

ぎゅっとレオのロープを握る。

「それで」のカラスに助けてもらひつて……」

「とりあえず、学院に戻ろ。話はそれからだ。」

「うん。」

レオがどこからともなく筆を出しながら。私はレオの背中に捕まり、学院への空を飛んだ。

カラスは私の腕の中で皿を閉じた。

* * *

私は一旦自分の部屋に入った。レオがひょっと待つひるといづつので、私とカラスはおとなしく待っている。

「いやー、わつきは悪かつたでやんすね。」

「うん、貴方が助けてくれなかつたら私、今頃どうなつてたか。」

考えただけでも寒氣がする。

「ねえ、貴方名前は?」

「あつしに名前はないでやんすよ。しがないカラスでやんすから。」

「そり。…じゃあ私が付けてあげる。」

「ど、とんでもないでやんすよーん、そりゃ、あつし……」

「いいのーあのね、サンダーってビーフーなんとなく似合つてゐると思うんだけど……」

カラスの目が光る。

「かつこいいでやんす！あつし感激つす！」

カラスのサンダーは一瞬目を涙ぐませ、羽をパタパタさせながら喜んだ。

「レオ、夕食はいいのかい？」

「ああ、部屋で食う。」

俺は自分の分の食料と霖の分を大量にトレイに乗せ、霖の部屋に向かう。
勿論、生徒指導員に見つからない様に。

しかし、と俺は考えた。

何故いきなり刃物で？

魔法都市第9区域は、魔法都市の中でも特に自然は豊かだ。
森や植物の影に何が潜んでいるかは解らない。
だが、それを見破れないほど、魔法都市治安維持部隊は野暮ではない。

そんな場所で何故？
それ以前に、何故霖は第9区域に足を踏み入れたんだ？

誰かに仕組まれたか……。
それとも只の考え方すぎか。

だが、霖が襲われたのは確かだ。只の考えすぎではない。

ぐるぐると思考を巡らせていくと、霖の部屋の前までたどり着いた。

周りに人が居ないか確認をして、そつとドアノブに手をかける。

「ほう、女子寮に侵入とは、貴様、趣味が悪くなつたな。」

いやはや、流石といふか何といつか。

「神楽ちゃん……」

正直、今一番会いたくない人だった。

「神楽ちゃん、その一振りしただけでそりゃあもう墓場へ直行的オーラを醸し出しまくつてる物騒以外の何者でもない金属性トーンファーを下ろして。」

もしかしたら力になつてくれるかもしれない。
だがそれには……

「ふん、相変わらず遠回しな言い方だな。私に何か協力してもらいたいんだろう。『言つてみる。』

本当に流石だ。

アルでさえ読めるか読めないかの俺の心が読めるのだ。

彼女の心は武士道と言つべきが、仁義心と言つか、日本特有の強い
信を持っている。

だからこそ、信頼できる。

「ああ、大切な話なんだ。霖の部屋で話す事になつててね。」

「待つていろ。暁を呼んで来る。冷静な判断力が必要なら、奴は絶対必須だ。」

神楽は漆黒の瞳をレオに向ける。

やはり凄い瞳だ。

これほど真っ直ぐな瞳を持つ人はそう居ない。

「ああ、待つてる。」

神楽は瞳同様漆黒の長い髪を揺らしながら地を蹴った。瞬間神楽はその場から姿を消した。

「そういうや神楽ちゃん瞬間移動者だもんな。テレポーター」

そう思いながら扉を開け部屋に入った。

ベッドで眠りこけている人間とカラス。

「寝てやがる。」

マヌケなカラスと頼もしいテレポーター（後書き）

はい、こんにちは

魔法都市の説明文を次回か、その次くらいに更新します！

番外編：魔法都市設定（前書き）

はい、魔法都市の簡単な設定分です！
情報が増え次第更新します！

番外編：魔法都市設定

『魔法都市』

魔法都市とは、総面積がおよそ40万平方キロメートル（日本よりもちょっと大きい）程ある大都市。

大規模な魔術実験、魔法育成、超能力研究などが中心に行われる都市。

主に魔術師・魔法使い・呪術師・鍊金術師・超能力者などが中心にこの都市に集うが、無能力者も少なくはない。

実際この都市は誰でも入れる訳ではなく、魔法省の許可が下りないと来れない仕組みになっている。

この魔法都市自体、どの地図を見ても乗つてなく、1つのパラレルワールドとして存在している。

その為、元の世界から無断で魔法都市に侵入することは不可能である。だが魔法都市からの帰還は許される。

しかしその場合、1つの空間を飛び越えるので、汽車や飛行機等の中で酔う人が多数出るらしい。

再び魔法都市に入る時は、階段から落ちる、滑つて転ぶ、殴られ倒れる、等の衝撃を喰らわないと来れないとかなり不便。

交通機関等は無能力者用に魔法都市内部回線用空港など作られてはいるが、殆どが魔法の^{はつき}等に乗るなり、瞬間移動をするなり、魔法・超能力を使い空を通りのケースが多い。

だが、空を通りの人がだんだん増えて来たため、今は地下道も作って

いる。尚、地下鉄が走っておりその速さは時速500キロと言つ驚異的なスピード。

魔法と科学を両立し合っている関係であり、魔法都市は魔法と科学が上手く融合した都市である。

第1区域（エリア1）から第10区域まであり、場所によつて様々な特徴や性質がある。

まず第1区域（エリア1）には魔法省や魔法都市保安維持署、能力司法裁判所など、魔法都市の司令塔の役割を持つ。

第2区域（エリア2）は上から見ると地形が家の形に似ているからか、広い住宅地になつてゐる。

第3区域（エリア3）には、魔法を中心とした数々の実験機器やエネルギー開発が進むエリアになつており、危険な爆発物や薬品等が沢山有るため無断で侵入する事を固く禁じている。

第4区域（エリア4）は魔法都市の中で一番小ぢく、とても穏やかな町になつてゐる。魔法を使う杖や薬品はほとんどが一二で揃えられ、多くの魔術品の職人が集う場所でもある。

第5区域（エリア5）には、魔術師達の能力診断や魔法検査などを行う能力特定機器や魔力観測体等、様々な観測機器が揃つており、その全ての機器に魔術等で街が吹き飛ばない様固いバリアがされてゐる。

第6区域（エリア6）では、飲食店やテーマパーク等が沢山あり、子供から大人まで楽しめるアトラクションも豊富で休日は人で溢れ

かえつて いる。中でもネズミーランドが大人気。

第7区域（エリア7）は、教育施設が盛んで高等学校から幼稚園・孤児院などもここに設置されている。キャンベリー魔法学院もこのエリアにある。

第8区域（エリア8）には、大きな空港やヘリコプター設置所・航空設備等が有り、主に無能力者達が使う施設である。万全の管理体制で、第1区域（エリア1）に面している為か出していくもの入つて来るものの個人情報は掴んでおり、悪い事をする様な奴はここでシヤツトアウトされる。

第9区域（エリア9）は、魔法都市の中でも一番自然の管理が整っている所で、画家や音楽家等はこの自然の中で暮らしている。音楽も盛んで『癒しの地』とも言われている。一方、天体観測や気象観測機器の設置もされている。

第10区域（エリア10）は魔法都市大図書館まほうとじかんや魔法石・魔法歴まほうせきの資料館・研究所が有数と点在し、勉学に励む学生や学者達が集結する。

夜の密会

「おい！ 露起きろ！」

べちべちと頬を叩かれ目を覚ます。いつの間にか寝ていた様だ。むつくり上半身をお越し、部屋を見渡す。

居るはずのない人を見つけてしまい、完全に脳が覚醒する。

「神楽さん、暁さん。……何で私の部屋に？」

向かつて左には行儀良く座り肉まんを頬張った暁さんが居、右にはスカートにも関わらず胡坐あぐらをかき、鋭い眼光を向ける神楽さんが居た。

「神楽が可愛い後輩の為に力を貸したいってね。」

暁さんが一ツコロと笑う。

何だかひどく安心する笑顔だ。それに對し、神楽さんはこれまた大変凶器的な目を暁に向けた。

「そんなんじゃない！ 暁、貴様は一言多いんだ！」

クスクス笑う暁さんと言い訳をする神楽さんを尻目に、レオが口を挟む。

「俺が呼んだんだ。一人共心強い味方だから安心しろ。」

口喧嘩を終えたらしい神楽さんが腕を組ながら私を見据える。

「それで、何があった。」

私は今日の出来事となるべく細かく説明した。
話し終わるまで静かに話を聞いていた神楽さんと暁さんは、一度顔
を見合させてから口を開く。

「霖、恐らく君に草を摑つてきて欲しいと頼んだデータは偽物だ。
」「え？」

「モヒカン草はそう簡単にはとれないからね。自然が多い第9区域
の奥の方まで行かないと採れない草。」

実際に在るのかモヒカン草。

「第9区域に霖をおびき寄せる罠だな。」

「でもデータ先生が偽物つて、そんな事どうやってするんですか
？」

きょとんとする私に暁さんがニツコリ微笑む。
本当にいい笑顔だ。

「変装術って言つてね。服装や髪型ならまだしも、顔を変えるとな
ると相当な魔力とモヒカン草が必要なんだ。」

そんなものに使うのかモヒカン草。

「…………でもビリしてそんな事までして私を森に？」

私の問いは虚しく部屋に響いた。神楽さんも暁さんもレオも難しい顔をして考え込んでいる。

すると今まで私の横で眠っていたカラスのサンダーがモソモソと動きだした。

「どうしたのサンダー？」

「何かが…。」

「え？ 何？」

私とサンダーの会話にレオ達が顔を上げる。

「お嬢、何か、何かがこっちに近づいてくるでやんす。」「何かつて？」

サンダーのひ弱だが真剣な声に、私達は顔を見合わせた。

「つたく、次から次へと何なんだ！」

レオは立ち上ると窓辺に立ち、空を見上げる。

レオの次から次と言ひ言葉に私も頭に浮かんで来る事がある。

この世界に来たのはともかく、楽器庫で見た母親の名前、魔法省の役員と何か後ろめたい事しているエルモ先生、母親の名前を知つていて私に空の力があると言つた予言術教師、そして今日の出来事……。

「この短期間で起じた事があります。

「一体、この学院で何が起じているの？」

「暁！霖を頼んだぞ！」

「解ったよ。任せて。」

神楽さんの言葉にしつかり頷く暁。

「よつし、じゃあ行きますか。神楽ちゃん。」

「ああ、頼むぞ。3年ゴールドバーグクラス首席レオ・クレネル君。」

「

え？ 首席？

神楽さんはレオの手をしつかり掴むと力強く地を蹴った。
その瞬間二人が消えてしまった。

「レオは私達3年生の中でも有能な魔法使いなんだ。勿論神楽もね。」

「

知らなかつた。

「そうなんですか。神楽さんはともかく、レオが首席なんて。」

私の言葉に暁は柔らかく笑つた。

「さて、今からは何が起じるか解らない。いざとなつたら全力で守るよ。」

暁が立ち上がりながら私を見下ろす。

「ありがとうございます！」

まだこの世界の事も解らない、魔法も全然使えない私にとって、凄く頼りになる。

私達は空を見上げた。

友人と敵

鬱蒼とした森の中を進む影が一つ。

「どうだ、何か気配はあるか？」

そう聞いてきたのは神楽だ。

「いや、無い。もう少し奥まで行くか。」

「ああ。」

* * *

「ん？」

私と暁さんとサンダーしかいない静かな部屋に、暁さんのきょとんとした声が通る。

「どうしたんですか？」

私は暁さんの顔を見て答えを待つが、答えを聞く前に騒がしく部屋に入ってくるパジャマ姿の友人一人を見た。

「霖！！」

「大丈夫か！？」

凄い気迫だ。

二人共息を荒くして、目がかづびらいてる。

暁さんの方はといふと、そんな一人を見てニッコリと微笑んでいた。

さつきの反応はこの一人に気がついたからなのだろう。

「どうしたの？」一人共。

「ジエシカがカード！」

「危険信号だったのよ！」

「標的は親友とか言ってんだ！」

「私びっくりしちゃって！」

「僕だつて！」

……全くわからん。

後ろからクスクスと暁さんが笑う声がする。

ジエシカとコニーが暁さんに初めて気付き、硬直した。

* * *

「レオ！…」

緊迫した叫び声を上げたのは神楽ちゃんだ。

周りには黒布を被った集団が俺達を包囲している。

何かの宗教団体みたいだ。

俺の後ろで、神楽が操る日本刀の刃が擦れる音がする。

「レオ、私はこのいけ好かない連中をミンチにする。」

「レオ、私はこのいけ好かない連中をミンチにする。」

本当にやりかねない。

「殺しちゃダメ。」

生きして喋るべき事を吐いて貰わなければ。

* * *

「なんだー。良かつた！」

「これで安心だね。」

ジエシカとコニーが安堵している。

どうやらジエシカが毎晩必ずするタロット占いで酷い結果が出てしまい、不安に思つたジエシカはあととあらゆる占いを試した所、親友に災いあり、と出たらしく、男子寮に乗り込み荒々しくコニーを連れ出し、私の部屋に来たらしいのだ。

「ありがとうございます、心配してくれて。」

だが、私の部屋に暁さんが居たせいか、何を勘違いしたのか暁さんが災いの元だと勘違いしたらしく一人は暁さんに飛び掛からうとした。

私の必死の説得、説明で大分落ち着いた。

話は長くなつたが、部屋が血塗れになるよりはこくらかマシだ。

「ホツとしたらお腹空いちやつたね。」

私を真ん中にジョシカとコニーはベッドに座り込む。すると右隣のコニーのお腹がぐうとなつた。

「肉まん食べるかい？」

暁さんがカバンの中から肉まんを四つ出し、私達に分けてくれた。暁さんが一口頬張つてから「う。

「三人仲良しなんだね。」

私達はお互に目を見合させる。そしていつもみたいに笑つた。

* * *

ガツと分厚い本が開きバラバラと勢いよくページが捲れる。それと同時に足元に一重のペンタクルが現れ、止まつたページから長い剣が出てくる。

それを持つたレオは飛び掛かつてくる敵をメッタ打ちにする。

私達と敵達はレオが逃げられぬ様に張つた炎の膜で覆われた中に居る。

炎の熱で少し動くだけで汗が出てきて、黒い前髪が顔に張りつく。周りの森も、炎の所為で燃え上がる。

これは自然破壊だが、ここは魔法都市。

「後で治癒能力のある暁に治してもらおう。」

勢いよく振り落とした刀から、呻き声と血が出る。

ある程度やつた所で、レオの方を見る。

本を片手に、本から召喚される武器。

それに連動して七色に輝く一重ペントタクル。

見るたびに思う。

「派手だな。」

だが、流石ゴーラードバーグ首席なだけある。

あの爆発的な魔力と威圧感、オルムステッドでも充分やつていける。だが、ゴーラードバーグ特有のあのスピード感、電光石火の早さで敵を圧倒して行く姿はオルムステッドにはない。

シユツと後ろに刀を後ろにやると、一人の人影が倒れる。

残りは後少し。

とつとと片付けて、この熱い空間から解放されたい。

友人と敵（後書き）

こんにちは！

今日は戦闘シーンがあつて、レオと神楽けやんに戦つてもらいました

戦闘シーン苦手なので、これから頑張ります！

深夜の大騒ぎ

「暁先輩、俺達ここに居て平氣なんですか？」

口一がサンダーと遊びながら暁さんに聞く。

「ええ、平氣ですよ。心配いりません。」

どうやら口一もジョシカも、一晩中一緒に居てくれるらしい。暁さんはといえば、窓辺の椅子に座り窓の外を凝視している。

「それでさージョシカつたら怪獣みたいに吠えながら僕の部屋に来てさ！」

「んもう！あの時は私も必死だったのよ！」

「男子寮が引つ繰り返つたみたいだつたよ！」

よく解らない説明をする口一に、ジョシカが頬を膨らませる。そんなジェシカを見る口一の頬がほんのり赤くなつていた事を私は見逃さなかつた。

しばらくニヤニヤしながら一人の他愛のない話を聞いていると、大きな雷が近くの森に落ちた。

* * *

「で？誰の指示かと聞いてるんだが…？」

俺は地面に転がっている敵の親玉的な奴に問い合わせた。いかにも悪を気取ったひ弱な男だ。エルモといい、この事件、貧弱な男が関連しているらしい。

中々答えない男に痺れを切らしていた俺に後ろからもの凄い殺気が漂ってきた。

恐る恐る振り向けば、神楽が腕を組んで俺の前にいる奴を睨んでいる。

殺気が痛い、早くなんとかしないと。

「答えないと強行手段でいくぞ…」

片足を奴の肩口に掛けながら、腹の底から声を出すと、微かにひとつ声が聞こえた。

生憎今、ルーシィが不在だ。

個人情報を得られない。

全く面倒臭いが仕方ない。

俺は黒いローブに手を入れ本を握む。

と、やや同時に俺の横を何かが飛んでいった。

「ひゃあー！」

奴の叫び声に目を向けると、奴の周りに無数のナイフが刺さっていた

た。

「わざと吐けえ！…しまいにはメッタ刺しにするぞ…。」

神楽は俺を軽くよけ、奴に今も一振りで逝つてしまいそうな刀を、奴の首周りにちらつかせる。

「喋ります喋ります！しゃ、喋りますから…。」

死人の様に顔を真つ青にした奴は慌てふためき話をしあじめた。

* * *

「フンフン フン…」

医療関係を受け持つホヴィ先生は、薬草の沢山入った大きな籠を持って、森から学校に帰る頃だった。

夜に月の魔力を沢山吸い取った薬草は、効き目が倍以上になる。そんな時間を見計らつて、普段医務室にしるホヴィ先生は鼻歌混じりに薬草を刈つていた。

すると遠くで何かが爆発するような音が聞こえた。
しかしホヴィ先生。

「まあ…お祭りでもやつてゐるのかしら…。」

只今深夜の午前2時。

明らかに違うが、どうでもよさげにキャンベリー学院への道を歩く。

暫く歩いていたら、森に人影がぽつん、と立っているのが見えた。

ホヴィ先生はそっと木の影に隠れる。

そつと様子を伺うが、立ったまま動かない。

じつと前を睨んでいるようだ。しかし、その横顔に見覚えがあつた。

「あらやだ！ エルモ先生じゃない！」

ホヴィ先生はエルモ先生のただならぬ殺氣を察して、木の影に隠れて様子を見ている事にした。

終止と夢人（前書き）

大分更新遅れています！
色々忙しくて更新出来ずにいました。が、今話からまた更新します
ので、よろしくお願いします！

大きな雷が落ちた。

「てんめええつ！！」

「ひいいいつつ！！」

神楽の前で、まるで蛇に睨まれた力エルの様に小さくなっている親玉に、俺は思わず短くため息をだす。

「石だあ！？ふざけた事抜かすなあ！」

「ほ、本当に有るんです！この学院にあるつて、その・・・・」

涙をぽろぽろ流しながら語り始めた。情けない奴だ。

どうやらこいつは、何らかの力を持つてる『石』がこのキャンベリー学院にあると言っている奴等が居るといつ。

もつぱらさんな噂はその辺に「ロロロ」と転がっている。

長い歴史を持つこの学院、それと似たような話は山ほどある。

例えば、学院の噴水の下には龍を司る剣がある、時計塔の鐘が鳴ると眠っていた魂が甦る、学院の秘宝は世界の運命を変える、など上げていったらキリがない。

「ほーう、トップの名前を言へ、言つんだ、さあ今すぐに吐け。」

関心したように神楽は問つ。

しかし聞き出せ無かつた。

いきなり奴が吐血をしだし、苦しそうにもがいたのだ。

「おー、どうした！？」

神楽が奴の肩を押さえた時にはもう遅かつた。

「神楽、もう死んでる・・・・・・。」

「こんな急に死ぬ事つて・・・・・・。」

「急いでここを離れよ。話は帰つてからだ。」

黒い塊で周りをつめつくされている中で、二人は地を蹴つた。

只今午前3時半。

流石に瞼の重くなつた私は、ジェシカとローが何やら話しているのを尻目に田を瞑つた。

「霖。」

誰？

優しそうな女の人の声が私の名前を呼ぶ・・・・・。

「霖。」

今度は違う声だ。

今度は男の人、ひどく安心する声。

でも・・・・・・

「何処にいるの？」

声の主は大体気付いていた。

「お母さんとお父さんでしょ？..」

一度も聞いた事の無い声なのに、一度も会った事の無い人なのに、何故か凄く懐かしい。

「霖、
なさい。」

え？何？

「石は必ず貴女
。」

聞こえないよ、もう一度言ひて。

声しか聞こえなかつた真つ暗な空間は、もつ声も聞こえなくなつた。

パツと目を開けると自分の部屋の天井があつた。
窓の外から日の光が入つてくる。

思わず目をしばしばさせながら、身体のお越し・・・・・・。

おかしいな。

身体が重いぞ？

「人の上でのうのうと寝ないでよー！」

私に覆い被さる様にして寝ていたレオを叩き起こす。

「ん・・・・・・。」

背中をバシバシ叩いても薄目を開けただけでまた寝てしまった。

その仕草にちょっとドキつてなつた気がする。

いやいやいや氣のせい氣のせい。

とぎまきしていると私の声で起きたのかジェシカが青い顔をして私達を凝視した。

「あ、ジェシカ、これは間違い・・・・・・・・」

次の途端女子寮に雷が落ちた。

思案のち出会い

朝、レオをぶつ飛ばしてから見た時計は既に10時を回っていた。

「つ、遅刻！！」

「うう・・・あ、いて・・・・。今日は休みだよ。」

レオが私から離れたのを見計らってジェシカがすっ飛んできた。

「霖！大丈夫？！何もされてないわよね？！」

昨晩外に出ていた神楽を置いて、暁さんが学院の見回りに出ている。

今私の部屋に居るのは、サンダーとレオと神楽さん、ジェシカと口二一だつだ。

暁さんが全員分の朝食を持つて見回りから帰つて来てから直ぐに、夜の間何が起こったのかレオが話してくれた。

「あの場所で誰かが操つていたとしか考えられない。」

心臓発作でも出たかの様に急に死んだといつその人が、誰かに殺されたとレオが言った。

「口を滑らやうとした部下に上の連中の誰かがあの場で殺した。」

レオの声が私の部屋の空気を重くし、朝食をましくさせた。
私の腕の中でむしゃむしゃとナゲットを噉っていたサンダーも、気が
まずさからか真ん丸の皿を閉じる。

中々解けない重い空気をものともせずに破つたのはコニーだった。

「大丈夫さー。」

今までの話を聞いて一気に暗くなつた心に、一筋の光が入つてくる
よつな聲音。

「父さんが言つてたんだ。どんなに厳しい現状が來ても、仲間を信
用しきつて、信頼は闘う術が無くなつた時の唯一の武器だつてね！」

コニーの顔が窓から入つて來る太陽の光に輝く。
まるでひまわりの様に。

「だからさ、大丈夫さー。」

根拠はないけど、と照れくさそうににこにこにかむ彼に自然とこっちも笑
顔を取り戻す。

「そうだな。何も心配する事ない。いざとなれば私と暁とレオがお
前達を守る。」

「ですね。」

「ああ。」

こんな世界に来てしまって、こんな事に巻き込まれてしまったけれど。

悪い事ばかりでは無いかもしない。

仲間が居れば大丈夫。

私はそう心に刻んだ。

天気のいい放課後、私は授業が終わってから外で遊ぶ訳でもなく、何処に行こうか校内を徘徊していた。

ジェシカもコーヒーも薬草学のレポートに追われている。

あの騒動から約一ヶ月、怖いくらいに何にも起きなかつた。起きて欲しいなんてミジンコも思つてないが、あまり何も起こらないうのも氣味が悪い。

行く宛が決まった。図書館に向かつ。

まだ「」の文字は読みづらいけど、それでもある程度までは読める様になつた。

図書館の無駄にでかい扉を開くと、いつも図書委員のレオが踏ん反り返っている机に、只今外出中とプレートが乗っていた。

私はそこを素通りし、占星術の本棚に向かった。
大量の本を眺めながら適当にページをパラパラ捲り、自分でも読め
そうな本を探していく。

ふと手に取った本の題が、

『女の子の為の占星術』

表紙にはハートが沢山浮いている。

「なんだこりゃ。」

パラパラめぐると挿し絵や文字が大きくて読みやすそうだった。
どうしてこんな本が図書館に有るのか解らなかつたが借りてみる事
にする。

本棚の間を抜けて、門を曲がりつとしたら誰かとぶつかってしまつて。

相手の持つていた紙の束がバサバサと落ちる。

「すみません！よそ見してて……」

私は慌てて紙を拾い、立ち上がり際に田が合つた。

ふわふわでキラキラ光る金髪に、吸い込まれそうな青い瞳。
思わず息をのむ。

「大丈夫だよ。僕のほうこそぼーっとしゃって、『めんね。』

真っ白な肌、高い鼻、整った顔立ちと見ただけで解る育ちのよさと、紳士な対応と口調。

どこかのハゲとは大違ひだ。

「僕、ウェル・シュミット。君の名前は？」

狼の尊

緩やかに笑つた彼の名前は、ウェル・シユミットといい、ハンプシヤークラスで一年生らしい。

「霖は一人っ子？」

図書館を出て長い廊下を一人で歩いていると、ウェルが私に聞いてきた。

「うん、一人っ子だよ。」

くすっと笑う仕草に、ドキドキしてしまつ。

「そつか、いいな一人っ子。羨ましい。」

「ウェル兄弟居るの？」

「居るよ、問題児がね。」

苦笑しながら言う彼に、私は思つた。

こんな素敵な子の兄弟が問題児なわけがない。
心の中で私は頷いた。

「じゃあ私はこっちだから。」

廊下の突き当たりで私は、ジェシカとコーネーの居る薬草学の教室に向かうため一度立ち止まる。

「ねえ霖、また僕と話してくれる?」

照れくさがりの仕草にこいつはほほわとした気持ちになる。

「全然いいよ。また話そつね。」

私がそう言つとウヘルはにっこり笑つて、おでこにキスをしてきた。

「...」

咄嗟の事に顔がじわじわと赤くなる。

「ありがと。じゃあまた。」

ふんわりとコロンの匂いがした。私は只何も言えずにウヘルの背中を見て呆然としていた。

「んー?」

俺とアルは今一階の占星術の教室にいる。

俺が必死にレポートを描いている時、隣でのんびりしていたアルがこれまた間延びした声を出した。

「どうした?」

レポート用紙から顔を上げると、窓の外を凝視しているアルが目に移った。

「あの黒髪の子。レオのお気に入りの子じゃん？」

黒髪のお気に入りの子？

約一名頭に浮かんだが、無理矢理排除する。

「狼君と歩いているよ。」

「は？」

自分で声のトーンが下がったのが解った。
窓の外を見ると反対側一階の廊下を金髪のガキと森が歩いて居るのを見つけた。

「狼のシユミットか。・・・・・本当に狼なのか？」

「さあね。見た事無いから何とも。」

あの金髪が入学した時からこの学院では大きな噂になつた。

彼には狼族の血が交じつてゐ

「不気味な噂だな。」

「低能な誰かが流した『マダラウ』。見た感じあの子、優しくて穏やかな雰囲氣があるし。」

ま、アルの言つ通りかもしない。

森に危害を加えなければ（手を出さなければ）まあそれでよしとしき。

ん、また、何で俺があいつの心配してるんだ。

「あ、ちゅーした。」

アルの言葉に俺の思考が停止した。

「お嬢！」

「二一の頭の上に乗つていたサンダーが、薬草学の教室に入るなり飛んできて肩に止まつた。

「レポート終わつた？」

「まだ、ジョシカつてば薬草学が苦手だから。」

「あなたも対して変わらないでしょ？！」

「二一は既に終わつている。

隣のジェシカのレポート用紙を見るともうジシと並んでいた。

薬草学の教室を出ると、もう夕食の時間になつていた。
色とりどりの食材が置かれたテーブルを見て豪華だな、といつも思う。

味もいいし、量も沢山ある。

適当に席をとりサラダにフォークを指す。

三人で世間話をしながらむしゃむしゃとアオムシの様にレタスを食べていると、隣に赤い髪をショートカットした子が座つた。

誰が座る？特に気にもかけない私は、無視して次はチキンを食べようと手を伸ばした。

しかしその手は、隣の赤毛の子の手とぶつかりてしまった。
思わず手を引っ込める。

「あら失礼。アタシもチキンが食べたかったものだから。」

凛とした声とむぎむぎした口調でせりふと言われ、彼女は自分のチキンを皿に乗せた後、私の皿にもチキンを乗せてくれた。

「あ、ありがとう。」

「いいのよ。」

彼女はそれ以上話さなかつた。私もそれ以上何も言わず夕食を終わらせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3705m/>

SPARK CHANGE!!

2011年10月6日22時47分発行